

教職実践演習における“同僚性”の高まりと授業改善の一視点

音楽教育講座 井上 洋一

1 “学びの集大成”としての教職実践演習

筆者は教職コーディネータとして、リフレクションデーや教職実践演習の授業プランの立案、授業の実施・運営、全体評価等に参画している。その立場から、今年度のFDシンポジウムで、池野統括コーディネータから、本学の教職実践演習の全体像として、教職課程のDPと授業内容、教授組織（クラス編成・担当教員）、評価方法等についての具体的な報告がなされたこと、また、山崎教職センター長により「他大学の状況と教職実践演習の意義」と題して、愛媛大学が実施している教職実践演習の特徴を明らかにしたことは、多くの教員に教職実践演習についての共通理解を得る機会となり、非常に重要な意味があると感じている。報告の中で強調して述べられていた通り、教職実践演習は学生にとって“学びの集大成”であり、教職決して科目の延長科目ではなく、教科教育担当者のみが行うものではないからである。

2 第3回 授業モデルの意図

学校教育講座の小田氏からは「教職実践演習からみた学生の姿」と題し、第3回の授業テーマ「学級づくりと幼児・児童・生徒への対応」の授業について、授業担当者として用いた資料や学生の反応についての報告がなされた。この第3回の授業モデルは、筆者が立案を担当した部分であり、非常に興味深く拝聴した。授業担当者には、この授業モデルの意図を次のように伝えている。

学校現場では、学習指導や生徒指導のあらゆる場面において、教師の発する言葉が、子どもに大きな影響を与える。教師の言葉次第で、学習意欲が向上したり、生きることを励まされたり、その逆に疑問や反感を抱いた経験は、誰もが少なからず学校生活の思い出として持っている。

この授業では、朝の会、終わりの会、特別活動など、授業以外のさまざまな場面を取り上げて、教師の思いをどのように伝えればよいかを、受講者自身の体験に基づいて考察する。

授業の前半は、受講者自身が小・中・高等学校時代に印象に残った教師（校長、学級担任、部活動顧問等）の言葉を書き出し、その場面の状況や、教師が伝えたかった思いについて、子ども（小・中・高等学校時代の自分）

と教師（教員を目指そうしている今の自分）の立場を両方の視点で考える。後半は、グループワークを通して、子どもへの言葉がけの在り方や留意点についての意見を交換する。授業後は、校種に応じた場面を想定した教師のスピーチ原稿をレポート課題として課す。

教師に求められる最も重要なコミュニケーション能力は、子どもに向けたメッセージの発信力であるが、その教師のメッセージは、目の前の子ども、さらには我が子を見守る保護者の気持ちまでも汲み取り、時や場面に応じた“輝く言葉”として発せられなければならない。

2 “同僚性”を高める

実は、この授業モデルは、筆者の中学校教員としての現場経験に基づいている。教師は、教科指導だけではなく、児童・生徒や保護者の前に立って、自身の教育観を言葉として伝えなければならない場面がある。教科指導の内容や指導方法は、大学での学びで身につく部分も多いが、こういった場面で何を語るべきかについては、自分自身の恩師、そして教職に就いてからの先輩や同僚教員の姿の影響が大きい。学校朝礼、学校行事における校長講話や式辞、先輩教員を手本にして書いた学級経営案や学級通信、輪番で書く掲示板や学校新聞のメッセージ、同年配の同僚との教育談義等々である。教職実践演習では、多くの授業においてグループワークが行われるが、この回のグループワークでは、恩師や同僚教師の援助や助言が、教師の専門的力量を高めるために大きな役割を果たすことに気づかせる場面を作る意図もあった。

教職実践演習では、自身の教育観の振り返りをくり返し行い、グループワークで意見交換をさせている。これはある種の“同僚性”の高まりに寄与するものと考え

る。また、こういった場面を設定することは、他の科目や授業においても、授業改善の在り方の一視点となり得るのではないだろうか。



“学びの軌跡”を語る場面